光城精工の最高峰モデルがグランプリを受賞

仮想アースの機能を組み合わせた
新発想の画期的な電源ボックス

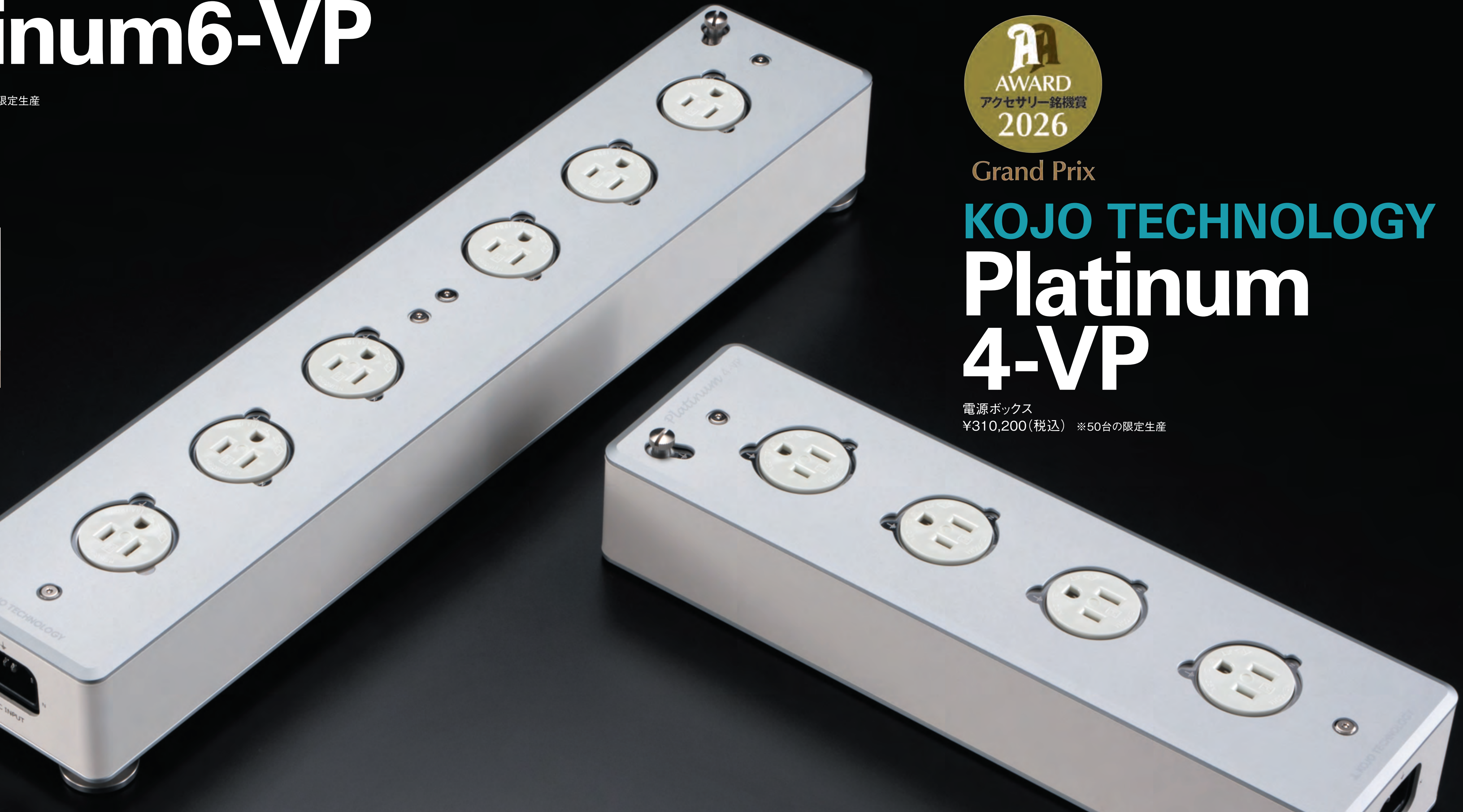
光城精工の設立35周年を記念して発売されたハイエンド電源ボックス「Platinum4-VP」と「Platinum6-VP」がオーディオアクセサリー銘機賞2026において栄えあるグランプリを獲得した。本製品は従来品と異なるプリント基板による大容量電源供給方式を採用し、電源ラインの静電シールドと低インピーダンス化によりノイズ抑制を図るとともに、振動対策としてMechanical Isolation System（M.I.S）を導入することで、高い剛性と堅牢性も両立させている。世界各50台限定生産モデル。

Photo by
田代法生（製品）
君嶋寛慶（人物）

Grand Prix

KOJO TECHNOLOGY
Platinum6-VP

電源ボックス
¥435,600（税込） ※50台の限定生産



Grand Prix

KOJO TECHNOLOGY
Platinum 4-VP

電源ボックス
¥310,200（税込） ※50台の限定生産

Text by
炭山アキラ
Akira Sumiyama

仮想アース技術を取り入れた光城精工のハイエンドモデル

光城精工の電源ボックスというと、「つなげて使える」クリスタルシリーズがすぐに思い浮かぶ、という方は多いのではないだろうか。とても便利で音質的にも優れた製品群だが、どちらかというと普及価格帯に属するものといってよい。しかし同社はそもそもが技術集団的な企業で、オーディオより高い信頼を要する医療関連でも、さまざまな電源周りの機器を開発・供給している。その技術を結集すれば、世界のハイエンド・コンポーネンツをドライブできる電源ボックスが生まれるのではないか、などと夢想していたら、それが本当に現れたので驚いた。同社の創業35周年を飾る限定モデル、Ｐｌａｔｉｎｕｍ４・ＶＰおよび同６である。

一般に電源ボックスの内部配線は、極太の撚り線かブスバーと呼ばれる肉厚の金属板が用いられていることが多い。ところが本機は何とプリント基板を採用しているというではないか。そんなもので大電力を流すことができるのかといえば、もちろんそこに手抜かりがあろうはずがない。一般的な基板のパターンの導体厚は、35ミクロンのところ、４倍の１４０ミクロンという厚みを持たせ、幅も37・５㎜とすることで、撚り線でいうところの５・５スケア（５・５㎟）と等しい断面積を得ている

Specifications

【Platinum4-VP】●ライン導体表面積(typ.)：N/L／46,000cm^2、GND／46,000cm^2●コンセント：3Pコンセント（NEMA5-15R）×4口●サイズ：90W×63.8H×326Dmm（アース端子含まず）●質量：2.3kg

【Platinum6-VP】●ライン導体表面積(typ.)：N/L／69,000cm^2、GND／81,000cm^2●コンセント：3Pコンセント（NEMA5-15R）×6口●サイズ：90W×63.8H×489Dmm（アース端子含まず）●質量：3.3kg

【共通】●電圧：AC100V（定格AC125V）●周波数：50／60Hz●容量：1,500VA●相数：単相アース付き●絶縁耐圧：AC1,500V 1分間●絶縁抵抗：DC500V 100MΩ以上●インレット：3Pインレット（IEC60320 C14）●コンセント：3Pコンセント（NEMA5-15R）●付属品：マニュアル、保証書●取り扱い：（株）光城精工

という。インレットから各コンセントまでのパターンは一直線に伸び、ニュートラル（N）とライブ（L）の配線パターンにグラウンドが挟まれて、パターン上で静電シールドが完成している。

撚り線やブスバーよりもコストと手間がかかるプリント基板を採用したのは、そこに仮想アース装置を装着するためでもある。コンセント1基当たりN／L各2個のアルミ電解コンデンサーを搭載することにより、1基で片ラインに1・15㎡（！）の金属面が加わることとなる。さらに、グラウンド・ラインにも4-VPで8個、6-VPでは14個搭載されている。これはもちろんグラウンド・ラインが導通した3Pの壁コンセントでも卓効あるが、2Pの壁コンセントから給電した際でも、機器に3P電源ケーブルで接続していれば、それが機器へ仮想アース装置を装着したのと同じこととなる。2P電源のユーザーにもぜひ注目してほしい。

シャーシは二重構造となっており、メインシャーシは天板と底板が厚手のアルミ製、環状型のサイドフレームが鋼製だ。コンセントと配線基板が載るサブシャーシはステンレス製で、天板へ取り付けられることで底板からダイレクトに振動を受けることがない。底板には、ステンレスとハネナイトの複合素材インシュレーターがマウントされている。

安定感のある圧倒的な情報量で音楽的な豊かさを性格に伝える

本誌試聴室で音を聴いた。レファレンスもかなり優れた電源ボックスなのだが、本機に取り替えて音が出た途端、もう絶句ものである。クラシックは情報量が何倍にも増えたような音楽の豊かさ、端正さに耳を奪われ、しかもそれでいてある種の過剰さ、音のくどさが全くない。どっしりと大地に根を下ろしたような安定感へ、超ハイスピードに音が飛び去って行くような爽快感が加わり、音楽が楽しく聴き心地の良いことといったらこの上ない。

今回の試聴では、あえて試聴室のグラウンドが接続されていないコンセントから給電し、プリアンプ以外のコンポーネンツは全て2P電源ケーブルで接続（アースループ回避）。N／Lラインに装着された電解コンデンサ（パターン表面積の拡大）により、ラインインピーダンスが低減。その効果が電源ラインへダイレクトに効き、グランドは機器の電位を安定させる方向に効いたのであろう。

ポップスはとにかく歌手が歌へ込めた抑揚、愛の喜びと慎ましやかに生きねばならない人生へのほろ苦い諦観、そういった情感が奔流になって耳へ流れ込んでくる。

もちろん簡単に購入を決断できる製品ではないが、この歌を聴いた瞬間に購入を決断する人がおいでになっても、私は驚かない。それだけの価値が必ずある表現だと、確信した次第である。

Platinumシリーズは、4-VPと6-VPのそれぞれが世界限定50台ずつとなっており、どちらも35台までは非売品の高級電源ケーブルが付属される。壁コンセントからボックスまでのラインを、本誌レファレンスの電源ケーブルからそれに取り替えて音を聴いたが、さらにスッキリと音楽が伸び、サラリとした質感の中に微小域が生き生きと弾む。思わず「電源ケーブルだけでも発売しないのですか？」と、取材に立ち会ってくれていた同社のジョンがる隊長こと土岐泰義さんに伺ったら、残念ながら発売は考えておられないとか。本誌発売時点で、まだ残っていればいいのだが。購入希望者は販売店へ急ごう。

審査委員が語るPlatinum“4-VP / 6-VP”の魅力

福田雅光 *Masamitsu Fukuda*

高域への帯域が拡大され広い空間の爽快なサウンド

光城精工は創立35周年にあたり、Platinumシリーズの電源ボックスを開発。4個口のPlatinum4-VPと6個口のPlatinum6-VPがあり、コンセントには明工社のシングル型ホスピタルグレードを装着。このモデルには内部配線系に両面プリント基板を採用しているが、一般的なものよりも厚みのある140ミクロン／幅：37.5mmという断面積で大容量化を実現している。オーディオ用途として、このような電源ボックスに採用された例は聞いたことがなく大変興味深い。構造としても大変合理的である。

音元出版の試聴室で6個口のモデルにサエクの高級電源ケーブルを接続して試聴を行った。すると、すっきりと高域へ帯域を拡大、空間を広く表現して爽快なサウンドが現れる。ほとんど経験したことのないバランスである。中低音のエネルギー密度は多少弱めな印象を示すが、解像度が高く明晰さのある表現は魅力である。低音は締まりを効かせ分解力は良好である。

林 正儀 *Masanori Hayashi*

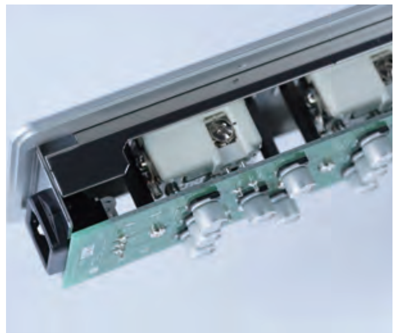
電気エネルギーの変換効率が高く接続機器のポテンシャルを100%発揮

世界限定50台のレア製品だ。4口と6口タイプが用意され、内部配線がわりの極厚プリント基板はおそらく電源ボックス史上初。その効果と得意の仮想アース技術も加え、KOJOならではのノウハウで作りあげた一品ものである。

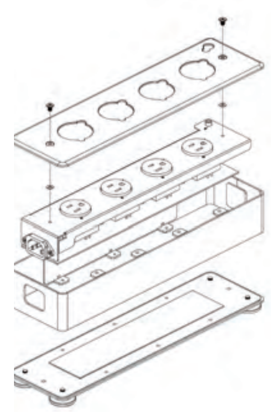
Platinumにふさわしい白金色のボディで高級品の風格だ。微細振動をも消滅させる巧みな筐体構造で、電気系のS／Nも素晴らしく優秀。その音は純度やレスポンスを高め、キラキラと輝くような立体的な音場空間を描き出す。音に高さと奥行がある感じだ、ステレオ2次元が3次元になり、イマーシブ（没入）の世界に入り込んだかと錯覚する。

通常のコンセントボックスとは次元の違う効果だが、音調そのものはナチュラルなワイドレンジで、どしっと安定したピラミッドバランスだ。ここでは主にCDやプリ、ステレオパワーなどをつないだが、電気エネルギーのロス感がなく接続機器のポテンシャルが100%発揮される印象だ。Platinum4-VPと同6-VPとでは口数の違いだけで、効果はほぼ共通。さらに開発が続くようで、電源愛好家としてKOJOに期待する。

光城精工創業35周年を記念して、特別にチューニングされた電源ケーブル（非売品）が先着35名の方にプレゼントされるキャンペーンも実施



配線にはワイヤーやブスバーを使わない構造を採用。基板についているコンデンサは仮想アース、およびラインインピーダンス低減用のもので、グランド、N、Lラインはいずれも広大な面積が確保されている



メカニカル・アイソレーション・システム（M.I.S.）は、トップカバー、メインボディ、ボトムカバーに加え内部にサブシャーシを設けており、サブシャーシユニットは連結部を除いて他の機構から完全に隔離される構造になっている。これにより、外部振動や機構間干渉を抑制して安定した動作を実現している

鈴木 裕 *Yutaka Suzuki*

音の重心が低く空間の見通しに優れ電源ボックスとしての基本的な性能が高い

4口のPlatinum4-VPから給電した音は、音の重心が低く空間の見通しも良い。エネルギーが素直に出てくる印象で、嫌な付帯音もつかない。アキュフェーズのプリアンプに接続している電源ケーブルのアースをPlatinum4-VPのアースの端子へ接続すると、空間の見通しがさらに良くなり、女性コーラスの漂うようなニュアンスもより良くなる。

一方、Platinum6-VPもエネルギー感は高いが、Platinum4 - VPとの直接比較である今回のテストでは、Platinum6-VPの方が微妙に弱く感じる。ただし、空間の見え方や瑞瑞しい音色感などは、ほぼ同じといえる。ボディが大きくなる分、「振動コントロールが難しくなるか?」とも思ったが付帯音が増えることはなかった。アースの端子への接続でも効果はPlatinum4-VPと同様である。

両機ともに、仮想アース回路の効果もいいが、電源ボックスとしての基本的な性能が高く、音の印象は良かった。

井上千岳 *Chitake Inoue*

核心をぴたりと捉えた設計によりエネルギーが増して出方が楽になる

独自の仮想アース・テクノロジーを応用した導体構造など技術的にも興味深い点は多々あるが、今回は割愛して音質の点だけに触れることにしたい。

電源ボックスは電源を分配する装置だが、同時にエネルギーも分配することになる。そこを正しく理解して設計しないと、どこか偏った音調がシステム全体に広がってしまうことになるわけである。電源ボックスで音が変わるのは、大体こうした理由による。

本機は光城精工として初めての試みだが、さすがに核心をぴたりと捉えた設計を行っていることに感心させられる。その成果は音質に明らかで、エネルギーが増して出方が楽になる。どこかに引っかかっていたものが開放されて、信号の流れが滑らかになったのを感じるのである。ディテールの隅々まで神経が通ってきた感覚で、音楽に活力がみなぎってくる。

さらに仮想アース機能を加えると、今度は目に見えては静かさが増す。電源ボックスとしては珍しい装備だが、同社らしい構成である。限定生産というのが惜しいが、その意義は大変大きい。

園田洋世 *Yosei Sonoda*

電源ボックス兼仮想アースとして魅力を発揮画期的な性能差を耳で納得･実感させる

類例のない画期的な内容を耳で納得・実感させる電源ボックスである。音楽の背景を成す音場が、聴いたこと感じたことのないレベルで静かだ。ここまで静かだと聴き手の聴覚は逆に、このうえなく研ぎ澄まされるものなのだと分かった。楽音がアタックから、余韻が減衰し尽くすまでに経る時間的、そして空間的な過程のひとつひとつに驚かされる。まさかのプリント基板による内部配線・仮想アース技術の導入という斬新かつ高度な内容は、自作では困難で、自分なりに究極の音を求めて電源ボックスを自作し愛用する者としては悔しくもあるが、音を聴くとこれはもう「さすが光城精工！　降参！」と呟くしかない。

アース端子は外装ケースだけでなく基板のグラウンドラインにも接続されているので、このボックスのコンセントに2Pの電源ケーブルしか接続しない場合はこの端子に是非繋ぐべきである。繋げばS／Nがさらに向上する。電源ボックス兼仮想アースとしての本機の音調は、中低域に深みと豊かさがありながらも音像はぼやけず、ビシッと明瞭にピントが合う印象だ。

生形三郎 *Saburo Ubukata*

これまでの同社の仮想アース効果よりもニュートラルな明瞭さや音色感を実現

電源ボックス内の配線にプリント基板を用いるという画期的構造による恩恵が大きいのか、実にスピーディーかつ軽快なサウンドが心地よいアクセサリーである。一般的なプリント基板と比較して約15倍の断面積を有する基板によって、5.5㎟スケア相当という極太級の電源ケーブルのそれに比類する大容量化を実現しているといい、実に安定感のある出音を実現しているのだ。電源ボックスには電解コンデンサによる仮想アース（グランド安定化）技術も内蔵されているが、基板構造の影響か、もしくは初採用となる面実装タイプの電解コンデンサの影響なのか、これまでの同社の仮想アース効果よりもニュートラルな明瞭さや音色感を実現しているように感じられた。

価格帯だけを見ると、同社の他のラインアップと比べてその差は大きく感じるかもしれないが、同社35周年を記念したハイエンドモデルとして、その名と価格に相応しい出来栄えだと言って良いだろう。この構造や技術が、より価格を抑えたスタンダードクラスにも投入される予定とのことで、今後の展開も楽しみである。